

■ 地域と共に歩んで

〔地区社協について〕

地区社協には、何の気なしに入ったんですね。そのうち組織がだんだん大きくなってあちらこちらと活動していました。私なんて力がないですから、そんな立派なことは全くできませんでした。鵜沼地区は藤沢で一番の社協になろうよ、と、それだけを旗印にずっとやってきて、なんとか一番になった…かどうか分かりませんが、良いところまでいったのではないかと考えていて、いまだにそんな話をすることがあります。この間も話をしていたことなのですが、目標をちゃんと作って、その目標に向かってみんなで進むようにしないと。藤沢で一番の社協になろうとしたら、そうしないと。目標なしでただみんなで仕事をしてもらってはだめだよ、と話したところ、それは難しいんですよと言われました。いや、難しいことをやる

のが男だろうと。これは大事なことだと思います。みんな若いので、一生懸命仕事をしてくれる。でもただ進むだけではなくて、たまには立ち止まって「これは失敗だったな」「これは良かったな」と、ゆっくりゆっくり考えながらやることも必要ではないかと思っています。人生って皆さんそうじゃないですか。一生懸命やって、でもちょっと立ち止まってね。福祉というのは大変なことで、なかなか結果が表れてこないんですね。だから辛抱強くやるしかない。すぐには結果は出てこないですから。でもやっぱり、やらなければならないことです。

皆若いから今はあんまり考えていращやらないかと思いますが、健康が一番大事です。健康だけはちゃんとした考えを持ってほしいと思います。病気になったら本当に何にもなりません。自分のためにもならないし、世の中のためにもなりませんから、病気だけはしないように。ただ病気は自分で気を付けていてもなります、ケガもあります。できるだけ少なくするようにして、頑張っていたきたいです。

〔今の施設生活について〕

なんでもいいから一番に！悪くたっていいんです。「一番になる」ということが大事なんです。歌を歌う、声を出すということは事業所にとってマイナスではなくてプラスになるはずだと私は思っています。声を出すということは一番良いことだから、とにかく歌を大きな声で、どら声でもいいから大きな声で歌を歌おうよと施設に提案しました。最初は1週間に1回くらいなんて話があったんですが、いや、やるのなら毎日やろうよと。一番になるなら、毎日続けないとだめだよと言ったんです。「いや、毎日忙しくてできません…」と言うので、「じゃあ俺がやるよ」と言って、今、毎日やっています。最初は2～3人だったのが、7～8人超えて10人くらい、ほとんど字など読めない人もいますし、声を出せない人、寝たきりの人もいますが、でもここに来て。童謡ですから、みんな知っていますね。みんなで歌って。今日もこれから4時半からやります。

〔皆に伝えたいこと〕

世の中というのは、いろいろなことがあります。またいろいろなことがあって世の中というのは良いのですが、若い方は、これからの日本を背負って立ってもらわなければならない。若い方々は生命力、実行力もある、これは大事なことです。これから先、若い方や小さい子どもたちにはちゃんと育てていただきたいと思っています。人間が育つということは、先行きが明るくなるということです。ぜひ皆さんを引っ張って勉強をして、悪い勉強もしてもけっこうです。若い人たちを教育して、立派な世の中を作っていただきたいと思います。それは本当にお願いしたいと思っています。体を無視しないで健康だけは気を付けていていただきたい。私なんか小学校しか出ていない、学歴も何にもない、でも皆さんに助けられながら生きてきて。これだけは厳然たる事実で、ありがたい

ことです。そのために私ができることはどんな小さいことでもやりたいと思って今も考えているし、できることはやろうと思っています。100歳を超えた人間が何の役に立つ？役に立つわけがないじゃないですか、絶対に。自分の拳を上げて言えます！若い方たちが、これからやっていくのです。



昭和52年10月23日 妻と



力強くも、やさしい語らいで言葉が沁みる

人で輝くまち 鵜沼

今回の輝く人は…

北島令司さん

鵜沼地区社会福祉協議会の会長を務めるかたわら、同じ鵜沼地区にボランティアセンターを設立し、高齢者の日々の暮らしや生きがいづくりのサポートをしてきました。また、「ふじさわ傾聴連絡会」会長を会発足時から務め、地域の高齢者たちの心に寄り添う活動を続けるなど、鵜沼を藤沢で一番の福祉のまちにしたいと、地域福祉のために長らく尽力されてきました。

現在は鵜沼地区社会福祉協議会顧問、御年101歳。2024年3月には、鵜沼地区郷土づくり推進会議主催で講演会『くげぬま地域福祉シンポジウム』にて講演されるなど、後に続く地域福祉の担い手を育てる活動を続けていっしやいます。

くげぬまつながり隊では今回、北島さんにご自身の戦争体験から福祉に携わる経緯、そして未来を担うわたしたちへのメッセージについて語っていただきました。



■ 戦争体験 ～出征前から終戦まで

〔出征前〕

当時はみんな出征するのが当たり前のことだったんですが、でもやっぱり親子の関係というのは、それなりの関係があります。当時、戦争に行くということは「戦ってこいよ」ということだけで、絶対に言うてはいけなひのは「無事で帰って来いよ」。絶対、禁句だった。私は山の中の田舎育ち、おふくろも百姓家だったんですが、あと1時間で家を出るという時に傍に寄ってきて、もんぺ姿で「帰って来いよ」と、一言だけ言って、涙をぼろっと出した。それが最後の言葉だったんです。その前の晩に、親父とおふくろとの真ん中に入って寝て、おふくろは一晩中、右手をずーっと握って、朝までいてくれたんです。親父は関係なく寝ていましたけども。そういう点では母親というのは…、親父は親父の尊厳がありますからいいのですが、母親というのは、子どもにとってはもう神様のように大事な存在だったという印象を残しています。

〔戦争〕

「お国のために」ということ、これが当たり前のことだったんですね。自分の身を捨てても親兄弟を捨てても、国のためになるなら死んでいこうと、死ぬのはやぶさかではないという教育を受けてますから。それが当たり前だと思っていました。死というものは、あんまり深刻に考えないで、俺が死んだら国のためになるんだ、という考え方を持ってます。潔く死ぬことはないけども、死ぬことにそんなにためらうこともなかったですね。海の中に落ちたときも「俺が死んでも国のためになるのかな。本当になるのかな」と思いながら漂っていることもありました。でも、死ねば国のためになるんだという教育を受けてますからね。当たり前だと思って、今では全く考えられないことです。学校でもそうですし、軍隊に入ってももちろんそうやりますからね。死ぬという感覚はあまり持たないですね。襲撃があったとき迎え撃つために上に飛び上がって、4千メートル上で待っていて攻撃するんですが、真っ赤な、こんな大きな銃弾がバーツと飛んでくる中をよけて…、よけることもできないけども、突っ込んでいく。死というものが目の前にあるんですが、平気で…、平気でもないけども、無我夢中で突っ込んでいくというのはしょっちゅうあることでした。死というものに対してそんなに大きな不安というものはなかったですね。死ぬことが国のためになるんだ、天皇陛下のためになるんだ、という教育を受けてますから。特に、飛行機の中では死ぬのが当たり前だと思ってますから。兵隊の時は、そんな生活をしていました。

特別攻撃隊というものを作って、向こうから向かってくる飛行機に対して、最初時間がある時は4千メートルくらい上がって待ってて攻撃したんですけども、その待つ時間がなくなってしまって、最後の頃にはもう4千メートル上から飛んで来たら、迎え撃つ時にこちらは上がっていく。そうすると、もうほとんど落とされてしまって戦争にはならなかったんです。幸いか不幸か…、私にとっては幸いにして不幸だったんですけども、そういう戦争に巻き込まれて、落とすことはあっても落とされることはなかった。でも最後に台湾沖の航空戦で海の中に落ちて、4時間ばかり海の中で過ごしました。あの時に死んでしまえばそれまでだったんですが、飛行機が沈んで、私は救命胴衣の浮袋を付けていたので、沈むことはなく浮いていました。あの時は、天皇陛下だなんだということよりも、おふくろの…、ぼーっと

してなんだかおかしいなと思ったら、おふくろの、こんな大きな手が出てくるような気がして、ハッこれは死んじゃいけないなと。海の中で揺られながらも、その光景が…おふくろの手だろうと思うんですが、こんなしわくちな大きな手が出てくる。あれは死の寸前だったんですが、忘れることはできない一瞬だったですね。意識がぼぼ朦朧となっていた時に、たまたま、本当にたまたま通りがかった日本の駆潜艇に助けられたんです。

同期の奴がみんな死んでいって、靖国神社にみんな入っていく。俺だけはいまだに…、元気な時は毎年一回靖国神社に行っていました。残念だな、あいつらはみんな靖国神社に入るけども、俺だけは最後まで、今死んでも靖国神社に行けるものではないので、そういう点では心残りがある。そんなことが頭の隅に長い間、今生きているうちに何かできることがあったら少しでもやっておきたいなと思いが、あります。

戦争というのは、やってはいけない。絶対に、やってはいけないことだと思っています。

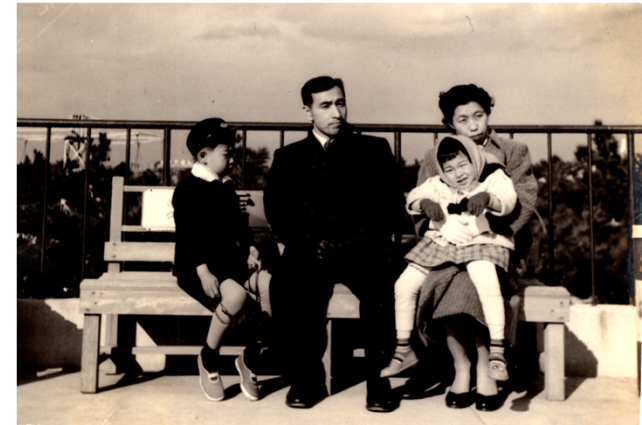
〔終戦〕

戦争が終わった時は、ジャワとシンガポール、昔は「昭南島」と言ったんですが、そこに基地がありました。一番最後の時には私はマニラにいまして、マニラ防衛戦という空中戦のため集結していたもので、70機くらい戦闘機を集めてマニラで航空戦隊を作っていました。前の日に空襲に遭って、全滅になってしまったんです。私の乗る飛行機がなくなってしまいました。終戦の時は、ジャワのジャカルタに向かって、飛行機の整備員と一緒に乗っていました。無線が入って終戦を知り、「戦争が終わったらいいよ」という話になり、「俺たち、家に帰れるのかな?」そんなことを話した記憶があります。

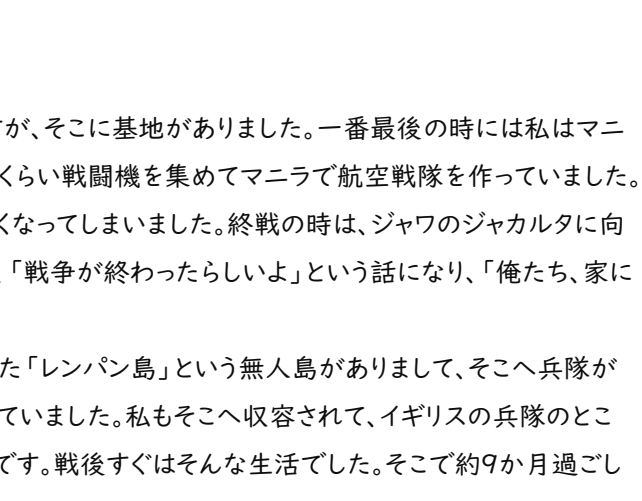
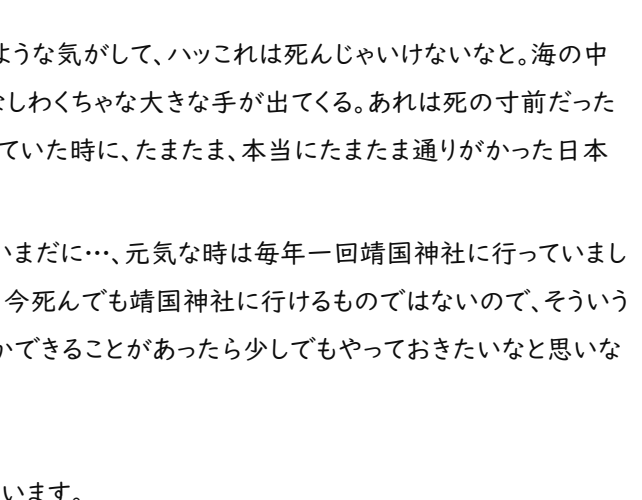
半年～7か月くらいシンガポールにいました。シンガポールからちょっと離れた「レンパン島」という無人島がありまして、そこへ兵隊が2万3千人～2万4千人だったか、全員その島に収容されて、そこで生活をしていました。私もそこへ収容されて、イギリスの兵隊のところでパン食生活でした。食事は米なんかありませんので、パンだけだったんです。戦後すぐはそんな生活でした。そこで約9か月過ごし



昭和32年 静岡にて



昭和31年 鎌倉にて家族写真



まして、リバティ船に乗って名古屋に帰ってきました。帰ってきた時は、あの当時で100円をもらって10円札を10枚と、小さなカバン一つでした。無料で電車に乗れるものをもらいまして、そこで東海道線に乗って名古屋から静岡まで来ました。みじめな、みじめな終戦でした。

終戦後に実家に帰った時は、みすばらしい飛行服とズボン、あと小さなカバンだけで、とぼとぼ3時間ほど山道を歩いて、まだ明るかった夕方5時ごろ家に着きました。「ただいま」と帰ったら、みんなぼーっとしてまして。誰が帰ってきたのか分からなかったんですね。「令司が帰ってきたんだ!」と大きな声で、ワーツとみんな寄ってたかって抱いてくれて。おふくろだけは傍にいて「よかったなあ」と泣いていました。

■ 戦後からの軌跡

〔戦後〕

藤沢には、戦争に行く前に郵便局にいたんです。通信講習所という、今でもありますが、1年間の郵便局の学校の試験に受かりまして。静岡で試験を受けて東京で1年勉強して、藤沢の郵便局に配属されました。それから兵隊に行きましたので、藤沢には少し住んだことがあります。終戦になって藤沢に来ましたが、郵便局は人手がいっぱいで断られました。その日はおふくろがおにぎりを5つくらい作ってくれて家から持ってきていて、3つ残っていたんです。その日どこかどうにか泊まる場所はないだろうかと探し、あるおじいさんとおばあさんのところがたまたま空いていて「うちに来てもいいよ」となり、そこへ泊めてもらいました。おにぎりだけ3つありましたから、食事はあるので朝と晩はいいよ、と言って泊めてもらうだけになりました。そこで日本精工へ行行って「勤めたい」と言ったところ、そこの受付の男の人が海軍の軍人だったのです。「俺は海軍だがお前はどこだ」と聞かれ、「私は陸軍です」「おうそうか、では日本精工へ来いよ」と言われ、そこで日本精工に入りました。陸軍と海軍で一緒になって…と、そんな陸軍やら海軍やら昔の言い方やめましようよ、と言ったところ、「いやいや、人生の中で一番大事なことから。死ぬまでおれは陸軍と海軍でやるんだ」なんて冗談を言いながら、日本精工に勤めていました。

とにかく私は、戦争に行ったんだから、もう誰も怖くないんです。課長とか部長とか偉い人がいっぱいいますが、一番おっかない人は日本精工の取締役でした。すぐ怒るんですね。上司も「何やってんだ!」と言って怒ったり殴ったりするものですから「こんちきしょう」と思って、お前なんかになんか負けてたまるか、俺は戦争に行ってきたんだぞ!とやり合って。でも結局、仲良くなりましてね。仲良くなった後「私学校にも出ていません、小学校しか出ていないんです」と言っていたのですが、「班長やれ」と言われ、またしばらくしたら「係長やれ」となり、また4～5年くらい経つと「課長試験を受けろ」

と言われました。課長試験は受けられませんが答えたら「俺の言うことが聞けないのか、ばかやろう」と言われ、「試験を受けました。受かったかどうか分かりませんがしばらくしたら課長の辞令が出て、多摩川工場に行くよう命じられました。「では辞める、そんな遠くまで電車に乗って通うことなんかできない」と言ったところ、課長からひどく怒られまして。あの当時は、殴ることは平気だったんですが、「俺の言うことが聞けないか」と殴られまして「聞けません」「では辞めろ」「辞めます」となり課長と喧嘩になりました。そこへ部長が出てきて、「やめることはないよ。ここにいろ」と言われ、それで藤沢に行くことになったんです。いろんな人生がありますね。戦争に行ってきた、人が怖くないんですね。部長だって課長だって、誰も全然。戦争に行ったら命を賭けた仕事場なんてものは、もう何も怖くないです。



昭和50年1月1日 娘と一緒に初詣

退職後は、定年後すぐ協力工場の所長を務め、3年ほどで正式に退職しました。その間少しづつ、地域のことをやっていました。地域のことはおもしろいですからね。生活に困っている人のところに酒を一升瓶持って行くと一緒になって飲んだりして、しょっちゅう酒を持って歩いていました。

